

# 指揮者って本当に必要？

オーケストラにはたった一人音を出さないプレーヤーがいます。そう、指揮者です。だからでしょうか、「指揮者って本当に必要？」ってよく質問されます。そこで、今回は指揮者のお話。

「みんな、指揮者を見ているの？」と訊かれます。初めて楽譜が配られ、音符をしかめ面して睨んでいるうちは、指揮者なんて見ている暇(?)はありません。見ているのは、始まりの合図だけ。だから、演奏者はできるだけ早く楽譜をおぼえて、指揮を見る余裕をつくる必要があります。

そればかりか、初めての曲では、指揮者が楽譜とにらめっこってこともあり得るわけです。そうならないように、指揮者はオーケストラを指揮する前に楽譜を見て予習しておく必要があります。

ところで、指揮者の楽譜って見たことありますか？

指揮者の楽譜は総譜(スコア)といって、全ての楽器の楽譜が縦に並べてあるという恐ろしいものです。何が恐ろしいかと言うと、楽譜をめくる回数が半端じゃなく、本番にめくり損なうと大変。だから、予習の際には、ページの間にきちんと折り目を付け、開きやすくするという重要な作業を疎かにできないのです。(プロの指揮者はこの作業をお弟子さんにさせることもあるそうですが。)

確かに、かつてはオーケストラの前に指揮者はいません

した。正確には、指揮者としてのプロはおらず、演奏者の一人が全体をリードしていたわけです。

ところが、ベートーヴェンの頃になると話は一変。楽器の種類が増えオーケストラは巨大化し、同時に曲そのものもかなり難しくなって、演奏者だけでは演奏しづらくなったからです。こうして指揮の専門家は誕生しました。

さて、指揮者の仕事についてですが、その九割以上は本番前に終わっています。つまり、曲のテンポを設定したり、音の大きさやバランスを整えたりするだけでなく、楽譜に書かれた作曲家の思いや当時の演奏スタイルなども考えながら、音に歌の命を吹き込み、数十人をまとめていく重要な仕事を、指揮者は本番前に済ませておかなければならぬのです。

冒頭で、指揮者は音を出さないプレーヤーと述べましたが、

指揮者が演奏する楽器こそ他ならぬオーケストラそのものなのです。

補足ですが、アマチュアオーケストラの指揮者には、プロの指揮者がない、さらなる試練があります。

各自の仕事などで毎回の練習に全員が集まれるわけではないので(本番で初めて全員がそろうこともしばしば)、欠席奏者のパートを歌ったり、怪しげな音程を辛抱強く修正したりする、文字通り耳の痛い仕事にも耐えなければならぬのです。

ですから、プロの演奏会だとお客さんが感動するのが普通ですが、アマチュアの場合は演奏者自ら演奏会が無事に終わったことに感動するのです。その中でもつらい練習に耐え抜いた指揮者は、最もねぎらわれるべき貴重な存在なのです。



ベートーヴェン作曲交響曲第五番「運命」の総譜(音楽の友社)

A page of a musical score for Beethoven's Fifth Symphony, movement 1. The score is for a full orchestra and includes parts for Piccolo (Pic.), Flute (Fl.), Oboe (Ob.), Clarinet (Cl.), Bassoon (Bn.), Double Bassoon (DBn.), Horn in C (Hr. in C), Trumpet in C (Trp. in C), Trombone (Trb.), Timpani (Tim.), Violin (Vn.), Viola (Va.), Violoncello (Vc.), and Double Bass (DB.). The tempo is marked 'Allegro (♩ = 84)'. The page number '102' is in the top left, and '240' is at the bottom right. The publisher 'OGT 5' is at the bottom center.